

緒言

人種解剖學 (Rassenanatomie) は人體解剖學 (Anthropotomie) の一部門であつて、解剖學者の従事すべき學問であるが、他方に於て之は人種學 (Rassenkunde) の重要な部分を爲すものである。即ち解剖學者は此部門の研究に従事する限りに於ても亦一の人類學者である。

解剖學上に於ける人種解剖學の位置、現況などに就ては詳細を語る餘裕がないから茲では簡單に片附けて置くが、解剖學者が研究上に地域的意識を加へた時に彼の學問は人種解剖學的となる。從來の解剖學者には此意識が薄弱であつた。元來解剖學などと云ふものは歐羅巴に興つたものであるから、當初に於ては歐人解剖學が即ち人類解剖學であつた。歐人解剖學が歐人解剖學に他ならぬ事を彼等が知つたのは實に最近のことに屬する。近代に於ける人類學の勃興によつて他人種への興味が喚起されたのも其原因の一つであるが、彼等が他人種に就て行ひ得る研究には制限がある。必然其知識は淺薄なるを免れない。若し斯學の中心がいつまでも歐米にのみ在つたとしたら、彼等のみが人類であり、他人種例へば黒人、米土人は人類のグリエーションであると云ふ觀念が、さう容易く打破されたとは思はれない。然るに彼等と同じ方法により、彼等が自己に加へたと同じ深刻さに於て、自らを解剖する民族が出現した。これ